

源氏物語新解 上 金子

八

金子元臣著

源氏物語新解

東京明治書院

大正十四年九月十五日 印刷
大正十四年九月二十日 發行
昭和二十三年十二月一日 二十三版發行

源氏物語新解上

定價 金四百參拾圓

著者

金子元臣

發行者

東京都千代田區神田錦町一丁目十六番地
三樹彰

印刷者

東京都板橋區志村町五番地
原喜平

印刷所

東京都板橋區志村町五番地
凸版印刷株式會社

發行所

東京都千代田區神田錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

明治書院

電話神田 (25)

三三三
四七番
四八番
四九番

配給元

東京都千代田區神田淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

序

私は學問上では非常に小心であり、又類のない鈍才であります。されば私の著書に右から左の一夜漬のものとは殆どありません。國文學に全生命を捧げてからここに三十五年、著書らしい著書と信ずるものは、まだほんの二三部にしか過ぎません。

源氏物語に指を染めてから、まづ源氏關係の圖書を出来るだけ蒐めて見たい希望を起して、都下は勿論、京都、大阪、名古屋の書肆の手を通して、本書末書をすべて、二十年間に殆ど三百餘種を羅致しました。その中遺憾と思つたのは嵯峨本源氏を逸して京都大學に遣つた事で、愉快と思つたのは河内本源氏を入手した時であり

ます。

研究の一端としては、私はかねてから源氏の定本を作らうと企畫してゐました。そこで板本寫本の別なく手あたり次第に對校を試みました。然るにあらゆる本が盡く同一系統の書であつて、そのきまり切つた訛舛や全くの誤寫を除いた、眞の相違といふものは極めて僅少で、それも大抵一定の箇處に限られてゐるのでした。勞多くして得少いこの仕事には全く落膽してしまつて、暫時中止の姿で過しました。

ところへこの河内本源氏を入手したのは、天が私の仕事に同情をもつて、望外の幸運をお授け下さつたことと、勝手ながら解釋して、ここに沮喪した勇氣を回復し、遂に定本完成の結果を見ること

が出来ました。

さてこの「定本」に、現代的様式の「新解」を施した本書の発表を以て、第一期の仕事の打切と致します。勿論第二期第三期の仕事も、大體の方針が立ち、材料も既に整つて、発表を待つばかりの手續にはなつて居ることですから、諸君の清覽に入る日もさう遠くはない事と信じます。

畏友故萩野由之君が嘗て私に向つて、成るべく間口を小さくし給へといはれたことがありました。

私は元來江戸子の端くれで、幼い時分から江戸文學に親炙したものです。で折折食指がその方に動く。萩野君の言はまさにこれを誡めてくれたことと思ひます。かうして小刻みながらも纏

つた物の出来るにつけても、同君のお蔭を深く感謝せずには居られません。

大正十四年八月

金子元臣しるす

例言

一、苟も源氏物語に觸るゝ以上は、如何なる立場の人でも手にするよう、との理想のもとに出現したのが、この『定本源氏物語新解』である。

一、この「定本」と冠稱する所以は、本文を校勘補正して、學者所依の善本を作つたからである。

その校正の方法は、普通流布本（青表紙本）を底本として、専ら稀代の珍書河内本を參酌したのである。又必ず誤謬と認めらるゝ箇處は、他本又は私見に依つて訂正を加へもした。但これは極めて少い。

青表紙本及び河内本の歴史その他に就いては、是非別項所載の論文「定本源氏物語に就いて」を一讀して、この定本の絶對價値を承知されたい。

一、この「新解」と稱する所以は、從來の注書が、多くは固陋煩瑣なものであつたり、或は一時を糊塗した惡書俗書であつたりするのを慨いて、一切の舊型を脱した現代的釋法

を用ゐ、前人の誤謬を一掃した簡約で正確な注解を施したからである。全く源氏の注釋は、この「新解」に依つて解放されたといつてよい。勿論口譯で、直譯を主としたが、時には意譯を混ぜて、偏に本文の趣のまゝに變化を自在にした。

- 一、各帖本文の初頭に、簡單な梗概を掲げて、まづ讀者の豫備知識を作る便をはかつた。
- 一、原文は章段なしの書きくだしであるが、今は學者の便を圖つて、大まかながら文段を分つた。

- 一、會話及び書簡には、「」の印を付けて、地の文と區別し、且その人名を標記した。

- 一、地の文中でも、主客の混線し易い箇處は、適宜に傍注して、それを判明させた。

- 一、原文は殆ど假字であるが、今は漢字を適宜に填てゝ、通讀し易いやうにした。しかし語意を害ふやうな無理な填方は、絶対にしない。否特殊の意味をもつた語などは成るべく假字のまゝに保存した。

- 一、傍訓は煩はしいので、普通讀み得る程度のは避けた。特殊の訓方のあるのは、必ず施した。重出の語は最初のに譲つて施さぬのもある。

又文中に多い「御」の字の訓は「オホン」「オン」「オ」「ミ」「ゴ」の五種に別れてゐるが「オホン」「オ」の如きは必ず傍訓を附けた。「ミ」は帖毎に初出の場合にのみ多く附けた。以上を除いた語で傍訓のないのは皆「オン」と讀んでよろしい。「ゴ」は御襖、御前の如きは施し、御覽の如きは施さない。

一、解は頭書標注の形式を採つた。その方式

標記した語の下にある符號のうち、

——は單にその語だけを解したものの。

——は、その語から以下の文句にまで及んで解したものの。

頭注の中、出典の書名を上書いたのと、下に括弧をつけて書いたのがある。括弧内のは註書の名で、まことの出典は不明なのである。

一、頭注は頗る分量が多かつたので、殆ど本文を全譯したと同様な結果になつた事を、特に斷つておく。

一、「目次即ち内容索引」を添へ、帖毎に目次を擧げ頁數を示して、捜査の便をはかつた。

一、各帖中の挿圖は、史實には距離があるが、源氏繪の最古板たる山本春正の繪入源氏物語から採つた。

二、本書は上中下三卷の豫定であるので、口繪は、上卷には河内本の古寫本二葉流布本河内本對校本一葉隆能源氏繪卷一葉を掲げる事とした。

三、系圖、年譜及び參考附錄手枕、山路の露は、便宜上、下卷の末尾に附ける事とした。

四、表題の文字は、帝室御物傳藤原行成筆和漢朗詠集から集字したものである。

五、表紙の意匠は、石山傳説を、そのまゝに取扱つた。

六、自分所有の永正河内本の缺本の一部を、平瀬本（應長河内本）に對校することを得たのは、偏に山脇穀氏の好意による。謹んで深謝する。

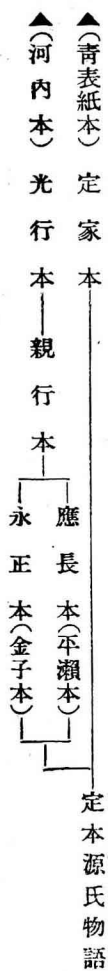
大正十四年八月

金子元臣しるす

定本源氏物語に就いて

金子元臣述

源氏物語に從來定本と稱すべきものがなかつた。その理由は外でもない、つまり參校すべき善本がなかつたからである。現存の流布本は、刊本寫本の別なく、すべて藤原定家（京極黃門）の青表紙本が本であつて、二三の異同こそあれ、全く同種同系の書だから、殆ど參照の價值がない。然るに本書は青表紙本即ち流布本を底本として、稀世の珍書河内本を對校し、衍誤を正し、脱漏を補つて、青表紙本を完璧に近からしめようと努力したものである。蓋し河内本は青表紙とは全く別系統に屬する異本である。これで本書が定本を標榜する所以が了解されるだらう。今この定本の系譜を作ると左の通りである。



一 青表紙本

青表紙本とは釘装上の名稱で、定家の校本である。定家は鎌倉初期に於ける歌壇の第一人者で、國文國歌に涉つて、各種の定本を作つた人である。殊に源氏物語は、その父俊成（五條三位）が歌人としての立場から、極力推稱したもので、

源氏見ざる歌よみは遺恨の事なり。（六百番歌合）

教長も清輔も源氏を見ぬはうたてき事なり。（正治奏狀）

と絶叫した。俊成はいふまでもなく、王朝末期の大宗匠だつたから、この人の一言は大きな刺戟を社界に與へ、歌人及び歌學者は相競うて源氏物語に赴いた。しかも俊成の源氏學はその傳兩流に分れ、一は男定家、女越部禪尼（俊成女）を経て、青表紙系の注疏の基礎を成し、一は源光行を経て河内方に入つた。

俊成には黄表紙の校本があつたが、定家は別に青表紙の校本を作つた。定家の子孫門葉は勿論この青表紙を執してゐたが、如何にせん、既に鎌倉時代からして、源氏は河内方の專賣となつて、その勢力が絶大であつた爲、青表紙本は殆どその存在を世間から認められない有様であつた。然るに室町時代の後期に至つて、青表紙本獨天下の時代が出現したことは頗る奇蹟であつて、實は奇蹟でなかつた。

二 河内本

河内本とは何か。四辻善成の河海抄に、

抑物語の證本一樣ならざるか。行成卿自筆の本も悉く今世に傳らず。源光行は八

本をもて校合取捨して家本とせり。所謂二條帥伊房本、冷泉中納言朝隆本、堀河内大

臣俊房本、號黃表紙從一位麗子本、號土御門右大臣女法性寺關白本、號唐紙小草子五條三

位俊成本、京極中納言定家本、號青表紙等也。各雖證本皆有異同、猶勘古本且可加了見者

耶、善者從之古人之美言也。

○愛所出七本也、加光行本八本歟。

と見えた源光行校勘の家本の事である。光行は河内守だったので、世にこれを河内本と稱する。

光行は定家の父俊成から源氏の傳を受け、更に又後京極良經、久我通光、後徳大寺實定等の諸家からも、その口傳を受け、源語の注書、水原抄を作つた人である。その校本は河海抄に據れば、自本の外に七本を校合したので、その七本の一には定家の青表紙本も數へられてあるのを見ると、實に青表紙本以上に完備した校本たる事は明らかである。しかもその校勘の業は、光行一代で終了してゐない。その子親行が又繼續的に筆を執つて、龜山帝

の文永の頃まで、諸家の秘本によつてその雌黃の手を休めなかつた。されば定家は更に光行の校本を借覽して家本を校正し、後嵯峨帝は親行の家本を召して覧覽あらせられ、北條實時は親行本によつて書寫を命じた。河内本の信用はかくの如く絶對であつた。

親行は又源語の注書、紫明抄を作つて、將軍久明親王に上り、更に諸家の説を訪ねて、原中最秘抄を作り、源氏學の最高權威者として京鎌倉の間を往來し、公武の間に重んぜられた。

寛元三年東宮後深草帝(源語)の論説を行はれ親行説を支證とせらる。(異本最秘抄)

建長六年將軍頼嗣の第において親行源語を講ず。(東鑑)

親行久しく鎌倉に在りて將軍實朝同頼經同宗尊親王の三代の間、和歌所の奉行源語の師範たり。而して頼經宗尊及び二條雅有に祕傳を許し、後徳大寺太政大臣、衣笠内大臣等その弟子となるを以て榮譽とす。門弟無數なり。衣笠内府いはく「親行は當道の棟梁なり」と。(異本最秘抄)

親行の家本は實に父子二代の澱いだ心血の結晶で、尊い善本であるうへに、その學問も重代で、一世の師範と仰がれた結果、家藏の校本は源氏物語の定本として、全く一般に承認される事となつた。善成の河海抄も、一條禪閣の花鳥餘情も、これに據つて注疏を作り、耕雲法師もこれを本として校正に歩を進めた。

三 河内本と青表紙との盛衰

昔あつたといはれる行成卿自筆本はもとより、光行が參校したといふ諸家の證本も、大抵湮滅してしまつて、只河内本と青表紙本とばかりが室町時代を支配したとはいへ、前者はその勢力太陽の赫々たる如く、後者は晨星の如く頗る微々たるものであつた。然るに端なく、人爲的に河内本が廢れ青表紙が興る機運が熟した。今その所以を左に。

室町時代はその時代自身が作つた僅な新興藝術の外は、渾べてが傳統の金縛に遭つた時代である。歌道においても、定家の門派たる二條冷泉の家元全盛の時代であつた。随つて定家を尊信することは殆ど神佛の如くであつた。釋正徹は歌道に於いて定家を蔑する輩は冥加に盡きると絶叫して、仰がざらめや定家の風と歌ひ、一條兼良は、歌道においては定家卿の説を離れては頗る傍若無人なりとまで讃稱した。かうした時好に投じて、早くも東常縁は古今集の系統的傳授を唱へ、定家をその祖師と仰いだ。時勢は漸く定家の校本たる青表紙に有利となつた。當時の歌人達が、その參考書たるあらゆる歌文書に、定家校本を採用する同じ事情のもとに、源氏物語をも置かうとする企が始まつた。河内本に對する叛逆者宗祇法師は、實に東常縁の門下で、古今傳授を得た定家信者の尤なる者

であつた。乃ち青表紙本によつて源語を講説し、注疏を作り、又門人三條西實隆の門地と才學とを藉りて、青表紙本の宣傳に努めた。

河内方の花鳥餘情の著者一條兼良の薨去は、室町時代後期の初頭であつた。かうした時機に際しての兼良の薨去は、河内本に取つて非常な大打撃といはねばならぬ。但親行の子孫宗高法師が將軍義熙の命に依つて、親行の最秘抄を上つたのも、その頃の事であつたから、まづ文明以後二三十年間は、河内本、青表紙本對立の時代と見て差支はあるまい。實隆の子孫公條實澄等はその家學を守つて、古今傳授の正統と稱へられ、兼ねて源氏學の泰斗として一世に仰高され、その旁流九條植通、運歌師紹巴の輩、又相次いで幾多の注疏を著し、争つて青表紙の流風を宣揚したので、天下また河内本をいふ者なく、全く青表紙本一流に歸してしまひ、河内本は遂にその片影すら見ることが出来なくなつた。

江戸時代になつて文運は復興し、殊にその後期古學派の學問が起つて、國文學の隆盛を來してからは、苟も學者といはれる者に、源氏研究に一指を染めぬ者はないといふ狀態であつたが、各種の刊本でも寫本でも、青表紙以外の本は絶無なので、衍誤も脱漏も多少意識しながら補正の道がなく、只暗中摸索にひとしい牽強の辯を附會するのみであつた。然し斷片ながらも、河海抄や、花鳥餘情等の前期の注書に引用した本文によつて、わづかに河